山陽新聞 2020/5/12 社会面

米アラスカ州のハドロサウルスの復元画（服部雅人氏提供）

恐竜2属 同属だった

北極圏からアジア進出か 岡山理科大など発表

白亜紀末（6900万年前）の植物食恐竜ハドロサウルスの仲間で、北緯53～40度の北米が生息域とされてきた「エドモントサウルス属」と、北極圏の米アラスカ州北部に生息した「ウグルナールク属」が実は同一だったと北海道大、岡山理科大などの研究グループが複数の骨を調べて突き止め、米科学誌に発表した。

高崎竜司研究員

エドモントサウルス属は北海道むかわ町で発見されたカムイサウルス属（通称「むかわ竜」）の近縁として知られる。今回の研究の結果、北極圏の厳しい環境に適応し、生息域を広げていたことになる。北米から当時は陸続きだったベーリング海峡を通ってアジアに進出し、むかわ竜などに進化していった可能性がありそうだ。

北大の小林快次教授や岡山理科大の高崎竜司研究員によると、ウグルナールク属は成体の骨がほとんど見つかっておらず、動物の骨は成長とともに大きく変化することから独立した「属」かどうかが疑問視されてきた。

白亜紀後期は地球全体が温暖だったが、北極圏は冬の日照時間が短く、餌となる植物の量が限られていたと考えられている。エドモントサウルス属の仲間は生息域が広いわりに骨の形に違いが少なく、環境への適応力が高かったとみられる。